

安川周作著『語られた歴史 島津久光』

(南方新社 2022年10月刊 205頁)

小 平 田 史 穂

この本のカバーは、いかにも頑固者そうな、口を真一文字に結んだ島津久光の石膏像である。島津久光のイメージは「西郷隆盛を冷遇した人物」「薩英戦争の原因となる、生麦事件のきっかけとなった人物」「古い文化に固執する頑固者」といったものが主であろう。どれも、決して彼自身の能力を好意的に評価するものではない。対して異母兄である島津斉彬の世間的な評価は極めて高い。斉彬は幕末という動乱の時代において、薩摩藩ひいては日本の近代化を目指して各種新規事業に取り組み、養女・篤姫（のちの天璋院）を将軍徳川家定に嫁がせ、西郷隆盛などの人材登用を以て後世にまで影響を及ぼした人物である。

斉彬が優秀なことは紛れもない事実であるが、忘れてはならないのは、斉彬の急逝後に、久光が29代当主忠義（久光実子）とともに『順聖院（斉彬）様御深志』の実現を唱え、割れる藩論を統一化し、実現させたことである。ではなぜ、久光は評価されていないのか。どのように語られてきたのか。彼の隠れた功績とは。本書は、これらを丁寧に掘り下げた一冊である。



島津久光の生涯

まずは島津久光の生涯を概観して

島津久光肖像画（尚古集成館提供）

みよう。

久光は文化14年（1817）に27代当主斉興の5男として、鹿児島島の鶴丸城に生まれた。幼名は普之進、次に又次郎、山城、周防、和泉、三郎、そして忠教（ただゆき）、久光である。久光は若い頃、重富家島津忠公の養子となったが、幼少より学問を好む実直な人柄であったとされる。兄の斉彬は、家臣宛の手紙（嘉永元年5月29日付 山口定救宛）で以下のように久光を評している。

「重富之事云々、此義は宜と存申候、此人随分宜しくと存申候（中略）
柔和には候得共、内心は柔和計りには有まじき様子と存申候、此人政事に差はまり候へば、よろしくと存申候」

重富家の養子となっていたことから「重富」は久光のことである。柔和そうに見えるけれども、それだけではない（＝芯と学がある）人物であるから、政治でよい結果を出すであろう、と書いてあり、高い評価が見て取れる。同時に、久光も斉彬について

「順聖院様の御事は我々より御評申上ぐるに弁なし。強いて申上ぐれば書経の言は蕩々として能く名くることなし」

と部下（島津家事跡調査員）の寺師に語っている。斉彬様のことで申し上げることはない（＝言葉にするまでもなく素晴らしい方だ）が、しいて言うならば、私たちは徳の広さに包まれているのだ、というような内容である。兄は弟の人柄と能力を評価し、弟は兄を尊敬していたことが分かる。

しかし、本人たちではなく、双方を支持する家老や藩士たちが、ある事件を起こす。島津家の御家騒動、通称・お遊良騒動（別名／高崎崩れ、嘉永朋党事件）である。世継ぎの座を巡る暗殺計画で、多くの処刑者が出た。この事件を契機として斉彬は当主になっていくのだが、彼が力をふるうことが出来たのはわずか7年であった。

安政5年（1858）、斉彬の急死を受けて島津家29代の当主となったのは久光の子・忠義である。久光は「国父」として、若い忠義をサポートする必要があった。それは薩摩藩内で攘夷派が台頭し、特に大久保利通ら誠忠組が藩政に影響を与えるほど勢力を伸ばしていたからである。久光は、斉彬が唱えていた公武合体に藩論を統一することに成功し、万延元年（1860）には、斉彬の計画であった蒸気船の購入にも着手した。

文久2年(1862)、大久保利通などとともに約一千人の兵を率いて上京。京都の船宿寺田屋にいた有馬新七ら薩摩藩の過激な尊王攘夷派の志士を制圧するためである。この帰路、久光の供侍たちが行列を乱したイギリス人商人を殺傷(生麦事件)。翌年に事件の犯人処刑と賠償金支払いを求めたイギリスが来航し、これを拒否する薩摩側と砲撃戦を交えた。いわゆる薩英戦争である。薩英戦争では、斉彬が造らせた大砲や砲台が大きな威力を発揮し、薩摩藩はなんとかイギリスと互角に戦うことが出来た。湾岸にあった工場群(集成館)などが大きな被害をうけたが、この事件によって多くの一般の薩摩藩士が、西欧の文化・科学技術を取り入れようとした斉彬の考えを理解出来るようになった。薩摩藩の近代化が前進するきっかけである。

久光は、公武合体運動の中心的存在となり、幕政改革を推進。後、西郷隆盛や大久保利通が台頭してくると、彼らと共に斉彬の遺志実現を目指した。維新後、内閣顧問に任ぜられ、翌年には左大臣に任命されたが、政府の急激な欧化政策に反対の意を示し辞任。晩年は、郷里鹿児島県の玉里邸に隠居し、歴史編纂などに力を入れることとなった。明治20年(1887)70歳で病没。国葬によって送られ、福昌寺墓地に眠っている。

幕末という動乱期において、藩主ではなかった久光が兵を率い、己の意見を主張し続けたことや、幕府に改革を促し、内閣顧問等役職に任ぜられた実績を鑑みると、久光の能力や人柄が決して「暗愚」ではなかったことが分かる。

史談会速記録を採る理由

本書では、市来四郎や寺師宗徳が久光から直接聞いた話として『史談会』で話をした内容を多く取り上げている。史談会とは、旧大名の島津・毛利・山内・徳川の四家と公家の三条・岩倉・中山の三家が編纂委員として組織運営し、月に一度、明治維新の当事者に話を聞き、それを記録する会である。現在『史談会速記録』としてその内容を見ることが出来るが、内容が非常に面白い。江戸時代の終わり、外国からの圧力を機として有力諸藩がそれぞれに意見を持ち、禁門の変、下関戦争、長州征討、戊辰戦争、鳥羽伏見の戦い、それらに関係する種々の諍いが起こった。そして時は流れ、時代が明治へと移り、政治体制が安定した時期に「動

乱」の背景を語る会が史談会である。語り手が維新の当事者であるから、内容が多岐に渡る上に濃いのである。

とはいえ、歴史研究者はあまりこの本を重用してこなかった。内容は面白いものの、会の参加者を意識した脚色、物事の前後関係などの記憶違い、かつての上司や同僚への親愛の情ゆえの証言が多く、真偽の吟味が不可欠だからである。本人（この場合は久光）が記した一次史料であれば、そこから時期や立場を考慮して論考を進めることが可能であるが、史談会は久光没後に結成されているため、「〇〇と久光公がおっしゃった」という情報の真偽を丁寧に精査する必要があるのだ。

今回著者はこの資料を採る理由について、このように述べている。

「書かれた歴史（史料）に語られた歴史（史談）を加えると、これまでとは違った見方が楽しめるはずです」

時間をかけ、久光の人間関係などを洗い出し、彼の人となりや功績に光をあてている。これによって「従来とは違う久光像」を浮かび上がらせようとしているのだ。愛情と使命感なくては成せないことである。

逃れられない、創作の影響

内容について、特に印象的だったのは、なぜ久光があまり評価されていないのかという点についての考察である。1点明確な答えを挙げるとするならば創作物（小説、映画などのフィクション）の影響は欠くことの出来ない要素だろう。

幕末の薩摩藩を描く上で、主役は西郷隆盛になりがちである。西郷はよく「貧しい下級武士の出ながら、人徳に厚く優秀で、島津斉彬公に能力を認められる。明治政府で陸軍大将兼参議などの大役を担うも辞職し、鹿児島の子弟訓育にあたる。そして西南戦争の将に擁せられ、戦死する」というストーリーで描かれる。その中で、若い西郷を登用する「憧れの対象」が島津斉彬である。その斉彬の死後に西郷をいじめる敵役となるのが「愚弟」の久光だ。実際に久光は何度も西郷と衝突し、島流しにしているため、西郷サイドの目線で見ると敵役として登場することも理解できる。しかし、史料を繰り、冷静に当時の状況を見極めると、西郷の独断が過ぎる行動も見て取れるのである。こうした部分を脚色し、読者の気持ちを盛り上がらせるエンターテインメントとして、小説や映

画・ドラマが大量に作られた。そして多くの人たちの間で、刷り込みのように久光の評価が低くなったのは、想像に難くない。上記した、島津家のお家騒動、通称・お遊良騒動も同様だ。藩主の妾（お遊良）が悪家老と結託し、本来の世継ぎである斉彬を押しつけて、自分の息子の久光を藩主にしようと企む、典型的なお家騒動のストーリーとして描かれてきた。中でも、現在エンターテインメント系の文学作品に与えられる「直木賞」の由来となった、大衆小説の大家・直木三十五が、この事件を題材として書いた『南国太平記』は大ベストセラーとなり、何度も映画化されている。このような有力な創作物の影響は計り知れない。

久光の考えと振る舞い

とはいえ、久光自身も、あえて「古いものにこだわる、頑固者」に見えるように、振る舞っていることは、示しておくべきだろう。

兄・斉彬の考えであった「富国強兵」「植民地化されない国づくり」を確固たる理想と掲げ、久光は明治維新という日本の政治システムの転換期に大きな力を発揮した。しかしその後、新政府がとった道は、急激な欧化政策である。急激な西欧化を推し進める新政府の方針に、久光は反発した。特に反発したのは、服装に関する事柄だ。明治5年11月に太政官令で、礼服に洋装を採用することが定められた。また同年、明治天皇が初めて鹿児島にいられた際に、洋服をお召になっていたことに驚愕し「近頃大礼服の御定めあり。全く西洋を模擬したるものにて甚だ不都合にあらずや」と勝海舟に述べている。これは、単純に和装が洋装になったことを嘆いているのではない。日々の服装や礼装を西洋式にすることは、「日本の伝統や文化の破壊」「精神的には、西洋に植民地にされた」と考えたのである。久光は松平春嶽に

「予は多少今日の風潮を矯むる（矯正する）の微意あれば、わざと頑固の風を装えり。予まで之に倣うことあれば国家の前途憂うべきことならずや」

と語ったと速記録にある。

世の中の急激な変化には、当然反発が生まれる。久光はそれを深く理解していたからこそ、西欧化に慎重な姿勢をとり、最後まで「和装で鬻を結う頑固者」を装っていた。日本が江戸時代までに培ってきた伝統や

文化、精神性が完全に消滅してしまわないよう、微力とは知りつつ、頑固に振る舞っていたのである。

島津久光という人物をどう評価していくのか。口を真一文字に結んだ彼の石膏像、銅像、肖像画の印象に惑わされず、「創作」からの影響を脱却し、複雑な幕末史に目を向けることで解明されるべきものである。安川氏はこの本で、久光について愛情をもって書き記し、それを成そうとしているのである。

(尚古集成館学芸員)